「言語美学」に関する文体論的考察

内　山　和　也

【要　　旨】

小林英夫が提唱した日本語の文体論は、「言語美学」あるいは「美学的文体論」と呼ばれる。小林英夫は、昭和期に始まる日本語の近代的な文体論の初期の代表的な論者でありながら、その文体論は後代に継承されることがなかった。本稿では、小林英夫の「言語美学」を再検討し、その理論的な含意を明らかにするとともに、文体論の基盤を美学（感性的な認識のあり方を論じる学）に置いたことによる理論上の問題点とを指摘した。

【キーワード】

言語美学　美学的文体論　文体　感性的認識　小林英夫

０．はじめに

小林英夫（1903-1978）は、ソシュールを世界に先駆けて外国語（日本語）に翻訳・紹介したことで知られる日本の言語学者である。一方で、1930年代から60年代にかけて、日本語の文体論でも多くの業績を残している。

小林英夫の提唱した文体論は「言語美学」とも「美学的文体論」とも呼ばれるが、その存命中から「美学的閉鎖性のゆえに多くの人に継承され難い宿命にある（西田1966：143）」と評価されていた。また、文体論をヨーロッパの "stylistique" に相当するものとしたうえで、独自の解釈を加えた日本語の文体論を提唱したことも、それをとっつきにくいものにした感が否めない[注1]。そのため、小林英夫の提唱する文体論には、実質的な批判ないしは検討が十分に行われていないきらいがある。また、一連の著書の刊行からすでに70年以上が経過し、現在、小林英夫の文体論が言及されること自体も少なくなってきている。

本稿では、小林英夫の「言語美学」を再検討し、その理論的な含意と美学を基盤とした文体論の可能性について明らかにしたいと考える。

１．言語美学としての文体論

小林英夫が提唱する文体論は、一般には「美学的文体論」と呼ばれることが多い。小林（1949：263）は「われわれわこれから新興の文章研究を公然称して言語美学といお～。」[注2]と、みずからの造語である「言語美学」の名称をとっている。また、「言語美学とわ、換言すれば文体論にほかならない。フォスレルにも、その師なるクローチェにも、言語美学とゆ～ことばわそのまゝでわ見あたらないが、フォスレルが名づけるところの文体論わまさしく言語美学である。（小林1949：147）」としていることから、以下、本稿では小林英夫の提唱する日本語の文体論と「言語

美学」とを同じものとして論を進める。

日本文体論協会（現・日本文体論学会）の編集による『文体論入門』（1966年、三省堂）では、小林英夫による「言語美学としての文体論」が「文体論の立場と方法」のセクションに掲載されており、その主張を端的に知ることができる。小林（1966：3ff.）は、文体論に４種の類型、すなわち修辞学的な文体論（語や語句を荘重体、中庸体、卑俗体などに分類するもの）、国語様式論（「一国語ぜんたいの他の諸国語とことなる総体的特徴をとらえようとする」もの）、ラングの文体論（「言語構造じたいに由来する」「情感性の表現」「および言語形態の表現価値一般を考察する」もの）、言語美学（「効果的表現がどのようにして偉大な言語芸術家によって創作されたかを探ること」）を区別し、言語美学の立場を支持すると述べている。ここで知られるのは、小林英夫が自らが翻訳し紹介したシャルル・バイイの研究[注3]を、「一般庶民の自発的表現に重きをおく（小林1966：８）」ものとして斥けていることである。小林英夫にとって、文体論とは優れた作家の天才を証明すべきものであり（「文体論はすべての文章を対象にとるものではなく、文体をもつ文章、けっきょく天才の文章のみを対象にとる（小林1976a：79）」）、バイイの研究は言語表現の個別的な変異を記述するものにすぎないために、文体論ではありえないということになる。

小林（1947）は、文体論の研究目標を「文章の表現効果の秘密を、さぐろ～と（小林1947：23）」することだと言う。文章に反映された個性を対象にする研究は「純すいに性格学的な操作に帰する……一つの応用心理学であり、独自の科学わなしえないであろ～（小林1947：24）」と述べ、「われわれの直接の目的からいえば、それわどこまでも補助手段たるにとどま（小林1947：24）」るとする。小林英夫が当時すでに唱えられていた「文章心理学」[注4]とは明確に異なる方向を指そうとしていることが知られる。そこで小林英夫が採用するのが美学的な前提である。その結果、「われわれの目標が美てき効果の秘密の発見にあるかぎり、価値評価をまじえることわ、当然のことである（小林1947：24）」とされ、「したがッて、一般人やぼんよ～作家の文章わ、はじめから眼中にない。われわれの対象にとるものわ、すぐれた文章芸術品のみである（小林1947：25）」ことが宣言される。ここでいう「価値評価」とは、ある形式が持つ使用価値の多寡である。すなわち、作品制作の形式は「製作者の側からいえば、合目的的なものである。すなわち作品が、それを用いる人びとの意図する目的にかなうものであることを要する。その目的にもっともよくかなうものが、もっともすぐれた作品であるから、ここに価値の概念が付与される。（小林1975：34）」のである。

なお、小林英夫は、文体論の基盤を「美学」に置こうとするが、これが「美しいものを研究する学問」ではなく、「ヨーロッパ語の "esthétique" の訳語にすぎ」ないことに注意を促している（小林1966：９）。すなわち、「言語美学」という際の「美学」とは、（理性と対立する）感性的な認識のあり方を論じるもの[注5]で、美の概念を問題にするものではないということである。これは、小林英夫のいう「言語美学」が、ドイツのカール・フォスラーからレオ・シュピッツァーに受け継がれる Stilistik（ドイツ語の文体論）の流れを汲むことに由来する。小林（1949：222f.）は、若いころ詩人になりたかった自身が「文学てき文献を、たんに言語史の材料とばかり見ずに、それがだいいちに美学てき鑑賞の対象として制作されたものであることを、したがってそれわ、まずもって美学てきに考察さるべきことを……言語学者のがわからも認めるもののあることを、知った……カルル・フォスレル（Karl Vossler 1872–）がそのひとりである。……レオ・シュピッツエルもそのひとりである。」と述べ、フォスラーやシュピッツァーの影響のもとで「言語美学」を構想したことを明かしている。そのため、「言語美学」でいうところの「美学」は、漢字表記に引きずられて、「美しい」ものを愛でたり「美」の概念を研究したりするものと受けとられて

はならないということになる。

2．文体論の方法論

日本語の文体論では、文学的文体論と（言）語学的文体論とが区別され、時に激しい論争のたねとなってきた。これは、文体論を文学研究と言語学研究の中間に位置する学際的な領域と見做したうえで、その目的や理論・方法が、より文学研究の領域に寄っているか言語学研究の領域に寄っているかに応じて分類するものである。最も文学研究的な文体論と最も言語学研究的な文体論を両極として、その中間に様々なレベルでの文体論が位置づけられるとする。このような理解については、すでにその当否を含めた多くの議論があるため、ここであえて繰り返さない。ただ、少なくとも、それが文体論の研究を見る際の便利な物差しとして用いられてきた（あるいは、現在もなお用いられることがある）ことは事実であろう。

小林英夫が関心を持つのは文学的な文章のみであり、かつ、文体論はラングの研究にもパロールの研究にも収まらないもの（小林1966：12）と考えている。文体論の研究史で見れば、小林英夫の文体論は「文学的な文体論への道を開いて行くことにな」り「国文学者や評論家・作家に大いに刺激を与え」たのである（山口1991：130）。しかし、小林英夫の文体論は、多くの場合、美学的とされ、文学的とはされない。そこには、文学的文体論と語学的文体論との対立を遡る時期に構想されたものであることはもちろん、小林英夫が文体論の方法論を問題にした姿勢があったものと考える。

文学作品を対象とした文体論の研究では、それが評論や批評としての性格を持つかぎり、個別の作家論や作品論が評価されがちで、理論や方法論の確立はさほどに評価されてこなかった。このことは、中立・客観を目指し言語学を標榜する文体研究でも大差はない。森（1991：157）は「文体研究は方法論の追求ではなく、読解の実践としての学問である。分析方法はテキストの外にではなく、そのテキストの内部に潜んでいる。」という山本忠雄（1940年に賢文館［現朝倉書店］から刊行された『文体論』によって、日本における語学的文体論の提唱者として位置づけられる）のことばを紹介している。それに対して、小林（1966：18）は「偉大な言語美学者 Leo Spitzer は、ただ『読め、なんども読め』（read and reread）とのたまうだけだ。これでは方法にならない」と述べ、文体論の実践において方法論を重視する立場をとっている。

しかし、方法論を明確にすれば文体論の実践が可能になるわけではない。ミカエル・リファテール Michael Riffaterre は、文体の理論的な研究においても文体論の実践（文学批評）においても共に高い評価を受けた稀有な文体論者であるといえるだろう（ただし、リファテールみずからは「言語学者」と名乗っている）。しかし、スコールズ（1992：57ff.）やタディエ（1993：285）は、リファテールの方法論の核心である読者概念（原＝読者 archilecteur）はリファテール自身でしかありえないと指摘している。すなわち、リファテールはひとりの優れた読み手に過ぎず、リファテールがその研究の実践において自身の提唱する文体論の方法を用いているとは言えないという批判である。そもそも、文体論において、ひとりの研究者が同時に理論家であり理論の実践者でなければならないという要請は、文体論が学問分野として未成熟であることを示す以外のものではない。成熟した学問分野であれば、物理学であれ生化学であれ天文学であれ、理論家と観測者や実験者とは対立的かつ補完的な関係にあるのが当然であろう。一方、小林（1966：5 f）は、文体論の研究者は敏感な文学者であると同時に冷静な科学者でなければならず、その資格を満たす者は稀であるという。では、小林英夫が求める文体論の方法論とはどのようなものであろうか。

３．文体論におけるパターン

小林英夫は、美学を感性の研究と捉えるが、文体論を「言語美学」と措定することの帰結のひとつは、文体論がある種のパターンと関わるということである。このパターンを小林（1966：13f.）は、美学の概念を用いて「様式」(注6) と呼び、様式を構成する特徴（同じ様式に共通して含まれる要素）を文体素 (注7) と名づけている。言い換えれば、「美学」の呼称には、文体論が共通のパターンを抽出する、あるいは、抽出されたパターンが要素の組み合わせとして説明されうるという発想があったものと考えることができる。

小林英夫の文体論にあって、文体素は文学性の直観を作家の人格と結びつける中間項として機能する。小林（1966：18ff.）は、文体素となりうるものに、⑴作品の構成、⑵作品の主題、⑶段落内の文の連接関係、⑷構文上の特徴や文の長さ、⑸品詞の構成比の偏り、⑹用語上の特徴、⑺比喩表現、⑻連文のリズム、⑼描写の技法、⑽描写の視点を挙げている。テクストの表層に静態的に観察される特徴を調べあげるという点では、文章心理学やのちの語学的文体論と変わりがない。しかし、それらが形態・形式の調査を起点ないしは記述の対象とするのに対して、言語美学ではすべてが中間項に過ぎないものとされる。小林（1966:21）は、書き手（作者）と読み手（文学作品の「鑑賞者」）の間に「作家の人格→芸術態度→作品理念→文体構造→文体印象」という線型の「因果系列」を想定し、読み手が受けとる特別な印象（文体印象）と作家の人格とを結びつけるものを「文体因子」と呼び、文体因子における言語的事実が文体素であるとする。

一方で、小林（1966：４）は「文体は要素的現象ではなくて全体的、構造的現象である」と述べる。つまり、文体という内包的全体性の認識は、読み手におけるその存在の実感（「特別な印象」）が前提とされなければならないわけである。たとえて言えば、自分の属しているグループ（学校や会社のような組織でも、地域のコミュニティでもよい）が現実的なものと感じられていないかぎり、自分がどのようなグループに属しているのか言い表わすことができないのと同じである。しかし、全体性がだれかによって現実的に感じられるほど、そのだれかによる全体の説明は主観的にならざるを得なくなる。そのため、シュピッツァーらの文体論は、読解における直接的な直観である感性を重視するのであろう。他方、小林英夫が文体論の方法論を追求したことは、読み手に実感される全体性を部分（＝パターン）に基づいて説明しようとする姿勢を示している。ただし、文体という全体的な現象が読み手において十分に現実的なものであれば、部分はそれよりも必ず観念的ないし論理的なものでなければならない。その結果、小林英夫の文体論は研究者に、直観と推論とを併行して行なえるという極めて特別な資質を要求するものとならざるをえないのである。もっとも小林英夫の文体論の構想にあって、相異なる資質を併せ持つ、あるいはそれらを再び統一することは、ひとつの念願であったということもできる。小林（1949：82）では「語学者（Philolog）わ本来『愛言家』であった。それが今日でわ、文学わかいもく分からぬ言語学者（Sprachwissenshcftler）と、言語わかいもく分からぬ文芸学者（Literaturwissenschaftler）とに分身してしまった。新言語学者（Neuphilologus）わ、二つの分身をふたゝび一体に合わせることを念願にする」と言語美学の立場を説明している。

小林英夫の文体論は、最終的に書き手の個性を志向する点では、文章心理学や「文は人なり」といった古典的な文体意識とかわるところがない。小林（1948：21）は「文体は、文体を創作したものからして、すなはちその原因からして、理解する外はない。」としている。その一方で、読み手を起点とするということでは、1970年代にリファテールや中村明が採用した文体論の立場（文体を作家の意図から独立させ、読み手の受容過程において記述しようとする）にも似ている。そこでは、文体の研究者は（読み手のひとりでありながら）読み手のいっそう外側に置かれ

る。そのため、リファテールに対しては、既に述べたように、そのような超越的位置がないとする批判がある。また、中村明に対しても、客観性を標榜して抽出した言語的特徴を既存の標準的な（したがって、なんら目新しくない）作品の解釈と擦り合わせて予定調和的に関係づけているだけだとする井口（1996）などの批判がある。他方、小林英夫の文体論は、文体論の研究者にそのような特別の位置を用意することなく、ただ特別な資質を求めるのである。

つまるところ、小林英夫の文体論の方法論とは、理論的に導かれた手続きではなく、客観的に実践できるような手段でもなく、ただ書き手と読み手とを線型に接続するための根底的な観念なのだと考えられる。

４．文体論と要素還元論

小林（1966：21）は、書き手と読み手の間の文体論的な因果系列（「作家の人格→芸術態度→作品理念→文体構造→文体印象」）について「おのおのの右項はそれの左項の必然的帰結でなければならない」とし、「その等式を証明することこそ文体論の課題にほかならないのである」と主張する。これは、概念の階層構造に基づいて、ある概念を上位の概念への必然的な置き換えによって説明しようとする点で（要素）還元論 reductionism である。

しかし、小林英夫の文体論では、文体が階層的な現象であっても、作家個人の人格が重層的なシステムだとは見做されていない。内藤（2012：58）は、階層性とはマクロからミクロを見る視点であり、「マクロの存在を前提として、諸対象はその中のサブシステムに変換されて把握され」る。一方、ミクロからマクロを見るためには、対象をマクロの階層が重なり合った重層的なものと見做す必要があると指摘する。文体が階層的なのであれば、作家の人格は、作品の数だけ階層的な現象が重なり合った重層的な構造でなければならないはずである。その意味では、小林英夫の文体論は作家の人格を明らかにしようとするものとは言えない。既に述べたように「文体印象」が十分に具体的で現実的な全体なのであれば、それを説明するものはより抽象的なものとなる。したがって、小林（1966：21）による文体論的な因果系列が成り立つのであれば、その基底に置かれた「作家の人格」は最も抽象的で観念的な〈部分〉とならざるを得ない。それは、もはや分析的に探求できるものではなく、したがって、重層的なシステムと考えることもできないのである。

文体の概念は、ことばがモノであることを基盤とすると考えることができる（月村1990：３ff.）。人間の外部に実在するモノであるからこそ、ことばが固有のかたちを有するのであり、そのかたちを認識ないし識別することが文体の概念を生じると考えられる。その意味では、唯物論 materialism 、ないし、物理主義 physicalism は、文体論に不可避に付随する哲学的立場といってよい。また、文体を文字や音声それ自体と見ないかぎり、文体は（文体よりも明確な）ほかの何かと関係づけて説明されなければならず、したがって、文体論は還元論的なものになるはずである（注8）。小林（1957：53）は、文体を実質的なパロール（ゲン）と区別して、「ブンタイわゲンの形態そのものでもない。ゲンの形態とゅ～のわ、個人の使用するゲンが、一時一処において取る姿のことである。それわ無限に多様であろ～。その無限に多様な姿そのものわブンタイでわない。無限多のゲンのあいだにおける同一てきなもの、別言すれば回帰てき構造を、ブンタイとゅ～のである。」と述べている。したがって、小林英夫の文体論が、還元主義的な形態をとるのは、むしろ必然的であるともいえる。

美学・芸術学の立場から、吉岡（2000）は、ドーキンス（1991：301ff.）の用語を借りて文体（スタイル）を「ミーム」であると述べている。ここで文体を遺伝子的な単位として理解する限

り、Langton（1989：22ff.）の指摘する条件が適用されることになる。すなわち、遺伝子的な単位（=“GTYPE”）と表層で観察される現象（="PTYPE"）との間には、特定の前者（GTYPE）から特定の後者（PTYPE）を予想する汎用の手続きは存在せず、かつ、特定の後者（PTYPE）から特定の前者（GTYPE）を指定する汎用の手続きも存在しないということである。このことは、遺伝子的な単位は〈設計図〉ではなく〈レシピ〉であると言う、ドーキンス（1987：328ff.）の比喩によって理解することができる[注9]。レシピが同じだからといって同じ味の料理ができるわけではないし、料理の味からレシピを特定することもできないということである。

もちろん、小林英夫は文体を遺伝子的な単位と考えているわけではない。しかし、小林英夫の文体論に見られる還元論には、文体論的な因果系列（「作家の人格→芸術態度→作品理念→文体構造→文体印象」）が、左から右方向へと成り立つと仮定してなお、それを右から左に向かって一意的に予測できるのか、さらに、それができるとしても、予測のための汎用の手続きを定めることができるのかという問題があることになる。実のところ、左から右方向への矢印を右側から左方向へ辿る具体的な方法はなさそうである。すでに述べたとおり、小林英夫の文体論の方法論とは、文体論的な因果系列を措定するための根拠にすぎなかった。あるいは、因果系列の左項が制御可能であれば、それを人為的に変化させることで右項の変化を観察するという方法はありうるだろう。しかし、言語美学で「作品」という完成された制作物が対象にされる以上、かかる実験的な方法の余地はない。

5．文体論とソシュール

冒頭に述べたように、小林英夫は主にソシュールの『一般言語学講義』の翻訳者として知られている。しかし、小林英夫は、のちにソシュールの言語理論、特に言語変化が無基盤かつ不定方向であるとする考えに強く反対するようになる。この点について、立川（1994）は、小林英夫が戦後の国語改革の実践を通じて、〈事物主義＝目的論〉を採って〈言辞主義＝機械論〉を退け、ついに「反ソシュール的な言語思想へたどりついた（立川1994:171）」のだと論じている。実際に、小林（1957：155）は、「SAUSSURE の『言語学原論』の、有名な結びの句：『言語学の独自かつ真正の対象わ、それ自体としての言語であり、それ自体のための言語である。』わ、もはや支持するわけにわ、いかない。」と明確にソシュールに対立する立場を表明している。言語は道具、すなわち「それ自体としてわ固有の目的を持たず……人間の行動の効率を高める性能がある（小林1957：30）」ものであり、「ゲンゴわ人間に対してわ、一つの手段にほかならない（小林1957：132）」ため、「人間わ規定するものであり、ゲンゴわ規定されるものである（小林1957：132）」。したがって、「SAUSSURE の体系観わ、機械論からモクテキロンえと修正されなければなら（小林1957：133f.）」ないというわけである。このような小林英夫の立場は、現状への人為的な介入によって人間が必要とするもの（言語について言えば、国民すべてが生活の中で便利に使用できる国語ということになろう）を実現しようとする調整的 regulating な目的論 teleology といえるであろう。それは、小林（1957:158）によって「目的論てき理想主義」（前者において機械論と、後者において実証主義と対立する）だとされる。一方で、小林英夫の文体論は、すでに見たように因果関係の連鎖で解釈される点では、目的論的というよりむしろ機械論的ではなかったか。なお、小林（1948：42f.）は、文体論が美学的な前提をとる有効性を、美学が目的論的傾向を持つことにあると述べている。美的対象を部分の総和以上の全体として捉えるかぎり、何らかの意図を持って創作されたものと考えねばならず、偶然で機械的な結果とは見做せないということである。しかし、作品を創作する天才的な個人と全体性を認識する優れた鑑賞者とを要求することが、

書き手と読み手の間の文体論的な因果系列を措定させることはすでに明らかであろう。

小林（1957：54）は「ブンタイとゆ～ものわ、作者が意識てきに作りだすものなのであるか。……おそらくそ～でわあるまい。……ブンタイわ作者にとってわ、その美てき理想の意識てきヒョーゲンとゆ～よりわ、むしろかれの性格の自然てきヒョーゲンとみることができる。」と言う。ここで、文体は人間の主観によらずに存在する自然的なものだとされている。文体に対してこのような立場をとることは、文体は文体の研究者に創造的に発見されなければならない性質のものだからであろう。小林（1957：55）は「ブンタイわ、通り一ぺんの鑑賞者にとって、ぞ～さなくとらえられるよ～な、そんな単純な特徴をしめすものであることわ、むしろまれである。多くのばあい、それわきわめて複雑な構造を秘めているものである。それゆえそれわ、すぐれた鑑賞者の直観によってはじめて認識されるところの、高度の意識てきジジツであると、考えなければならない」と述べている。小林英夫の文体論は基盤を美学（感性的な認識のあり方を論じる学）に置こうとする。そのため、文体は作者の「美てき理想」を再現する現象であることはできず、調整的な合目的論的にはそぐわない性質を帯びているものと考えることができる。

もっとも、ソシュールの言語変化に関する学説を否定したからといって、言語に対する小林英夫の立場が特にブレているというわけではない。小林（1948：134）は「言語の中核は意味であり、意味は判断であり、判断は思想であり、思想は生活である。……しかるに人格は何にもまして生活と最もかたい結合をなす。故に人は文章のなかに最もよく自己を反映せしめるのである。」と述べる。また、小林（1957：53）は、象徴（使用と効果との必然的関係、使用における相手の情感の刺激性、使用の様式への使用者の個性の反映という三つの条件を備えたもの）の体系を文体として、記号の体系である言語と区別している。そのうえで、「キゴータイケーたるゲンゴわ、可能態である。ショーチョータイケーたるブンタイわ、現実態である（小林1957：55）」とする。また、「文体とは、個人の自由意志による語詞、言い回しの選択である、ということができる。素材が言語であるかぎり、そして言語が定義上社会一般の理解手段であるかぎり、人に通じない語を用いることは許されない。素材としての語は、原則として万人の共有材でなければならない（小林1976b：83）」とも言う。生活の中で人々は、ことばを反復性（反復可能でなければ私的言語にすぎず、自分以外の他の誰とも話すことはできない）に委ね、創作の中で文学者は、ことばを一回性（この作品がほかならぬこの作品であることを主張する）に委ねるということであろう。そうであるとすれば、文学作品を対象とする文体論は、反復可能な単位がどのように一回性に捕らまえられるのかを明らかにすべきものとなる。小林英夫は、おそらく言語を人々が生活のために用いるものと考えており、その点で機械論的な言語変化を唱えるソシュールと異なった立場をとると同時に、文体論から「一般人やぼんよ～作家（小林1947：25）」を締め出すのである。

6．まとめ

ここまで小林英夫の文体論、いわゆる「言語美学」について考察してきた。

日本語の近代的な文体論を昭和期に始まるものと見れば、小林英夫は波多野完治や山本忠雄と並んで、初期の代表的な文体論者に数えられてよい。しかし、波多野や山本の立場が、ひいては語学的文体論という現在まで受け継がれるひとつの主流を形成したのに対し、小林英夫の言語美学が受け継がれることはなかったと言わなければならない。

すでに述べたように、西田（1966：143）は、それを「美学的閉鎖性」によるものと断ずる。小林英夫の文体論、すなわち「言語美学」が、文体論の研究者にかなり特異な資質を求めた結果だというわけである。もちろん「言語美学」のかかる高踏的な姿勢が後続の研究者から敬遠され

たことは想像にかたくない。しかし、問題はそれだけではないだろう。ここまでの議論で明らかなように、文体論の基盤を美学（感性的な認識のあり方を論じる学）に置こうとしたことは、その美学的な前提との整合性をとらんがために文体論を理論的に制約することにはなっても、その理論的探求の可能性を開くことにはならなかった。また、言語美学は実践の方法論を欠いており、いったい容易に継承できるものでなかったともいえる。

小林英夫が提唱した「言語美学」は、日本語の文体論でひとり小林英夫だけのものである。その原因は、その前提にもとより内在したものと言うべきであろうが、整合的で一貫した体系を目指して小林英夫の孤高の文体論、すなわち「言語美学」が続けられたことは記憶されなければならないのではないか。文体論の実践、すなわち論文の多産こそが褒め称されがちだったなか、その理論的な探究に敬意を表し、本稿の結びとしたい。

注

1）さらに、理論的に中心をなす著作や著作集（『文体論の建設』1942年、『文体論の美学的基礎づけ』1944年、『文体美学』1947年、『言語美学序説』1949年）が戦中から終戦直後の出版事情の芳しくない時期に刊行されたことも指摘できる。

2）引用にあたって仮名遣いは原文のままとしたが、句読点はテンとマルに統一し、旧字体は新字体に改めた。以下、小林英夫による文献からの引用では同様とし、一々の注記を省く。

3）波多野（1966：24f.）は、パロールである文章ではなく、言語（ラング）の表現価値を研究し「言語学的文体論」を開拓した研究者としてシャルル・バイイの名を挙げ、バイイの研究を日本に紹介したことを小林の功績としている。

4）一般に、日本語の文体論の近代的な研究は、波多野完治の『文章心理学』（1935年、三省堂）を嚆矢とする。文章に観察される形態的特徴を計量的に処理して、それを書き手の性格の類型に結びつけて説明する文章の〈性相学〉と呼べるものであった。

5）1735年にドイツの哲学者バウムガルテン A.G.Baumgarten が提唱した「美学」（ドイツ語では Ästhetik）は、知覚・感情・嗜好・直感・想像力などの感性的認識（cognitio sensitiva）を問う論理学の下位分野として構想されたものであったが、感性的認識の完全性が美と同定されることから、実際上、美と芸術の本質を問う理論と見做されることになった。（『岩波哲学・思想辞典』および『美学辞典』による）

6）フッター（1982：７）は「あらゆる〈様式概念〉は、比較によって経験的に獲得された秩序の上の要因であり、それはある時代、ある地域、ある芸術的個性の特徴的な形式を後から体系化したものである」と説明している。

7）フランス語の文体論でも「文体素」の術語が見られるが、これは「文体学」を提唱した篠沢秀夫の造語によるものであり、小林英夫の概念との関連性はない。

8）還元という操作自体は論理的な思考法であり、そのためあらゆる科学的な研究は程度の差はあれ還元主義的な側面を有している。酒井（2019：235f.）では、文系の学問は「心や言語までを自然法則に委ねようとする『一元論』は、根本的に受け入れがたいのだろう。」と指摘し、「人間の思考の根本には言語があり、そこには自然法則に基づく文法規則があるといっても、それは人間の自由意志を否定しているわけではない。文法に規則はあるが、人間は無限の組み合わせを持つ表現を自由意志に基づいて生み出せるからだ。」と述べている。

9）バルト（1979：112f.）は、文体（スタイル）は定型（ステレオタイプ）であって原型（アーキタイプ）でないと述べているが、同様の趣旨であろう。

引用・参考文献

井口時男（1996）「文学は文学をどう考えているか」, 井口時男・徃住彰文・岩山真『文学を科学する』（インターレクチュアライブラリ１）, pp.60-96, 朝倉書店
小林英夫（1947）『文体美学』（小林英夫選集第一巻）創元社.
———（1948）『文体論の理論と實践』八雲書店.
———（1949）『言語美学序説』（小林英夫選集第二巻）創元社.
———（1957）『言語学通論』（改訂第六版）三省堂.
———（1966）「言語美学としての文体論」, 日本文体論協会編『文体論入門』, pp.3-21, 三省堂.
———（1975）『文体論の建設』（小林英夫著作集７）みすず書房.
———（1976a）『言語美学論考』（小林英夫著作集５）みすず書房.
———（1976b）『文体論論考』（小林英夫著作集６）みすず書房.
酒井邦嘉（2019）『チョムスキーと言語脳科学』（インターナショナル新書037）集英社インターナショナル.
佐々木健一（1995）『美学辞典』東京大学出版会.
スコールズ, ロバート（1992）『スコールズの文学講義：テクストの構造分析にむけて』, 高井宏子ほか訳, 岩波書店.
立川健二（1994）「POUR OU CONTRE SAUSSURE?：未来の国語設計者・小林英夫の言語思想について」,『現代思想』22(9), pp.157-73, 青土社.
タディエ, ジャン＝イヴ（1993）『二十世紀の文学批評』, 西永良成ほか訳, 大修館書店.
月村敏行（1990）「文体まで」, 佐藤泰正編『文体とは何か』, p.1-20, 笠間書院.
ドーキンス, リチャード（1987）『延長された表現型：自然淘汰の単位としての遺伝子』（日高敏隆ほか訳, 紀伊国屋書店.
———『利己的な遺伝子：増補改題「生物＝生存機械論」』（科学選書９）, 日高敏隆ほか訳, 紀伊国屋書店.
内藤勲（2012）「地域社会の階層性と重層性：地域アイデンテイティを考える起点として」,『経営管理研究所紀要』19, pp.47-61, 愛知学院大学.
中村明（1974）「文体の性格をめぐって」,『表現研究』20, pp.1-11, 表現学会.
———（2016）『日本語文体論』（岩波現代文庫学術341）岩波書店.
西田直敏（1966）「文体論の展望　日本の文体論」, 日本文体論協会編『文体論入門』, pp.132-146, 三省堂.
波多野完治（1937）『文章心理学：日本語の表現価値』（増補改訂版）三省堂.
———（1966）「文体の心理学」, 日本文体論協会編『文体論入門』, pp.22-47, 三省堂.
バルト, ロラン（1979）「文体とそのイメージ」, 沢崎浩平訳,『現代思想』7(4), pp.106-113, 青土社.
廣松渉ほか編（1998）『岩波哲学・思想事典』岩波書店.
フッター, ヘリベルト（1982）『比較様式論』（西洋美術全史12）, 高階秀爾・高橋裕子訳, グラフィック社.
森晴秀（1991）「各国の文体論：回顧と展望　イギリス・アメリカ」, 日本文体論学会編『文体論の世界』, pp.147-157, 三省堂.
山口仲美（1991）「各国の文体論：回顧と展望　日本」, 日本文体論学会編『文体論の世界』, pp.126-138, 三省堂.
吉岡洋（2000）「スタイルと情報：メディア論を超えて」, 山田忠彰・小田部胤久編『スタイルの

詩学 倫理学と美学の交叉』, pp.136-159, ナカニシヤ出版.
リファテール, ミカエル（1978）『文体論序説』, 福井芳男ほか訳, 朝日出版社.
Langton, C. G.（1989）Artificial Life. In Langton, C.（ed.）*Artificial Life*, pp. 1-47 Redwood City CA.; Addison-Wesley.